

(1) 適正規模について

① これまでの主な意見

<小学校視察後>

小規模校 (6~11 学級) 視察 (鷹栖小 6 学級)	適正規模校 (12~18 学級) 視察 (砺波東部小 18 学級)
○教師の目が届きやすい。 ●1つの学年を1人が担当 ●校務分掌が多い。 ●競争力の低下 ●人間関係の固定化が懸念される。	●小規模校に比べると目が届きにくい。 ○複数の教員で学校行事や授業等について相談できる。 ○校務分掌を手分けできる。 ○若手、中堅、ベテランの教員がおり、それぞれの良さを生かせる。 ○いろんな仲間がいる。人間関係がうまくいかないときクラス編成で考慮できる。 ●集会等の移動に時間がかかる。 ○学ぶ環境としては適正と感じた。
○1クラス25人程度がよいのでは。(10数人では少ない、30人以上多い) ○特色ある学校づくり等、地域に子供を誘導できるような環境を柔軟につくる必要がある。	

(「○：メリット要素」、「●：デメリット要素」以下同様。)

<中学校視察後>

小規模校 (3~11 学級) 視察 (庄川中 6 学級)	適正規模校 (12~18 学級) 視察 (出町中 18 学級)
●すべての教科の教員の配置ができない。 ●部活動の種類に限られる。 ●部活動の顧問の充足ができない。 ○●小学校からの人間関係が引き継がれる。	○新しい人間関係が生まれる。 ○中学校でのリスタートができやすい。 ○適正な規模なのかと感じた。
○中学校に入ったときに生徒がチェンジできる環境づくりが大切。 ○学校と地域との連携が必要。	

<第4回委員会>

- ・1学年の学級数は、クラス替えできる2クラス以上がよいと感じた。
- ・小規模校、適正規模校にそれぞれ良さがあり、学校を選択できたらよい。
- ・小学校と中学校では、考え方は、違うのではないか。
- ・防災拠点など地域での学校の役割についても考慮するべきでないか。

<義務教育学校視察後(第5回検討委員会)>

- 9年間を見通した学習カリキュラムを編制できることや小学校段階から教科担任制を導入できるなど中学校課程への移行がスムーズである。
- 交流する年齢幅が大きくなり、いい影響を与えている。人間関係の固定化は少し解消されるのではないか。市内1校ぐらいあってもよいのではないか。
- 小規模な義務教育学校であった場合、小学校や中学校における小規模校の課題は、ほとんど解決されない。(人間関係の固定化や学級編制の課題、専科教員の課題、中学校部活動など)
- 中学生にとって小学生が身近にいる環境で学ぶことが本当によいことなのか。生徒指導上も様々な面で違いがあると思う。

② 望ましい学校規模について

<小学校>

- ・学級数

- ・学級人数

- ・その他
単学級、複式学級など

<中学校>

- ・学級数

- ・学級人数

- ・その他
部活動、単学級、複式学級など

<その他>